

ラジオ放送  
＜平成25年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声  
No.403



## もくじ ~ contents

### <あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えするQ&A

- 第1回 子どもと勉強する難しさ／背が低い悩み *page 1*
- 第2回 お願いをしてはいけない？／娘一家を助けて！ *page 5*
- 第3回 運命って決まっている？／何がありがたい？ *page 9*
- 第4回 お役に立つとは？／誰もが神様の愛しい子？ *page 14*

### <こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちよっといい話

- 第1回 おじいちゃんは神様だったね *page 18*
- 第2回 美しい心が育ちますように *page 22*
- 第3回 「サンキュー」から学んだ「おはよう」 *page 26*
- 第4回 信じる力 *page 30*
- 第5回 今日は親切にしよう *page 34*

### <天地は語る>

☞ 金光教祖の教えを解説

- 第1回 心配を神様に預ける *page 38*
- 第2回 あなたこそ大丈夫ですか *page 43*
- 第3回 先を楽しむこと *page 48*
- 第4回 降っても、照っても *page 54*

《あなたへの手紙》

第一回 子どもと勉強する難しさ／  
背が低い悩み

おはようございます。東京恵比寿にあります  
金光教麻布教会の松本信吉です。

埼玉県にお住まいの四十代主婦の方からのお  
尋ねです。

「私には、小学校四年生になる娘がいます。  
最近、毎晩台所で一緒に宿題や勉強をしていま  
すが、気が付くと『どうしてこれが分からない  
の!』と、叱ってばかりいます。すると娘は『も  
ういい!』と言って自分の部屋に戻ってしま  
います。良くないとは思いますが、どうしても、

ついイラッとしてしまうのです。どのように子  
どもと向き合えばいいものか、お聞きしたいの  
です」

こういうご質問です。

そうですか…。毎晩ご苦労様です。

実は、私も同じような経験があります。食べ  
物の好き嫌いの多い小学生の娘に「何で食べな  
いんだ」と叱っていました。叱っても好き嫌い  
が直るはずはなく、何の効果もありません。そ  
れが分かっているながら叱ってしまう私なので  
す。そして娘は、その度にふくれっ面をし、自  
分の部屋に閉じこもってふて寝してしまう。そ  
んなことの繰り返しでした。

そんな時に、去年の夏、金光教が主催するキ

キャンプに娘と参加したんです。娘とは別々のグループに分かれて、広いキャンプ場の中でテントの設営、料理や食事、キャンプファイアなどをして楽しく過ごしました。

後で聞いた話なのですが、娘のグループが食事をする時、娘はどうしても食べられないものがあったて、残してしまつたらしいんです。その残った料理を、大学生のリーダーが食べてくれたそうです。私は、それを聞いてそのリーダーに、お礼とおわびを言いました。すると、そのリーダーは、「私も小学生の時に参加したキャンプで、どうしても食べられないものがあったて残してしまつたことがあります。その時のリーダーが私が残したものを食べてくれた思い出があります。それはきっと、食べ物に神様から

頂いた大切なものだということ、一生懸命に教えてくれたんだと思います。だから、自分が育ててもらつた恩返しみたいなものです」。こういうふうに言つてくれたんです。

その言葉を聞いて、私は、十歳の娘の親としてのしつけの自覚を改めさせられると共に、娘にも、このリーダーのように育ててもらいたいと思ひました。

そして、今まで上から目線で叱りつけていた私自身の姿勢を反省し、このリーダーのように娘と同じ目線で話をしないといけないなあと思つたんです。子どものためと思ひ、いろんなことを教えたいと思ひるのは誰しも同じです。でも、親は子どものことを思ふあまり、ついつい自分の思いを一方的に押しつけてしまうこともある

んですよね。

金光教には、こういう歌があります。

「ちちははも 子どもとともに 生まれたり  
そだたねばならぬ 子どもちははも」

これは、子どもが生まれたと同時にお父さん、お母さんも誕生し、その子が一歳になれば、親も一歳。十歳になれば、親も十歳。親子一緒に育っていかねければならないということです。良い子になってほしいと願う分だけ、良い親にならせて下さいという願いも強く持たなければなりませんね。これからお互い、頑張りましょう。

次は、千葉県からのお尋ねです。

「僕は、二十歳の大学生ですが、身長が百六十五センチで、彼女もなかなか出来ません。インターネットで背が伸びると言われる食品を見付けて、色々試してみましたが、全く効果がありません。どうしたら背が伸びて、もてるようになりますか？」

今、あなたは背が低いことにコンプレックスを持っているようですが、背が高くないからでもないし決め付けることは、いかがなものでしょうか？

背が低くても魅力ある男性はたくさんいます。私はあなたよりも低い百六十三センチですが、それを苦に思いません。

まず、あなたが、ご両親から健康な心と体を

頂き、今日までお育て頂いていることに感謝の心を持ち、親孝行する気持ちを持つこと。そして、毎日頂く食事もありがたく頂く心を忘れないこと。

実は、私もかつて背が低いことにコンプレックスを持っていましたが、食事をありがたく頂くことを心掛けました。そうすると、勉強や趣味にも意欲が湧き、好きなことを色々吸収していけるようになりました。

好きなものが多くなると、自己紹介の時でも、「私はこれが好きです」と言えます。例えば、私の場合は「趣味はカラオケ、スポーツは野球、お酒はビールが好きです」と自己紹介します。すると、どれか一つにでも興味がある人が話し掛けてきてくれて友達になれます。身長の高い

低いにかかわらず、女性のみならず、多くの人と知り合いになり、人間関係も豊かになります。少なくとも、人間の善しあしは身長では決まりません。二十歳のあなたの人生はまだまだこれからです。そして、例えば背が高くななくても、きっと魅力的な男性になれると思いますよ。ぜひ、大きな夢を持って、頑張ってください。



《あなたへの手紙》

第二回 お願いをしてはいけない？  
／娘一家を助けて！

おはようございます。兵庫県出石教会の大林  
誠です。

今日はまず、大阪の大学に通っている二十歳  
の女性から頂いたご質問です。

「私は山口県の出身ですが、今は大阪の大学  
に通っています。私は別に信仰をしているとい  
う自覚はないのですが、幼い頃から神棚や仏壇  
に毎日手を合わせてきたので、大阪に来た今も、  
大学の近くの神社の前を通る度に、ちよつと立  
ち寄って、色んなことをお願いするのが習慣に  
なっています。ところが私の友達は『神様には、

お礼を言うならともかく、あまりお願いはして  
はいけないと思う。ましてあなたのように小さ  
なことまでお願いするなんて厚かましいこと  
だ』と言うのです。私は厚かましいのでし  
ょうか。金光教ではどう考えますか」

こういうお尋ねです。

なるほどねえ。神様にお問い合わせるのは厚かま  
しい、ですか。あなたのお友達は、何か信仰を  
持っておられるんでしょうか。私たちは神様か  
ら計り知れない恩恵を頂いているのに、その上  
に願い事をするなんて、そんなことしたら神様  
に不足を言うようなものじゃないかと、まあそ  
ういうふうにお考えなのかも知れませぬね。

確かに、人間同士でもそうですよね。例えば





の中身が変わってくるかもしれない。だけどそれは後のお楽しみです。とにかく神様に近寄らせてもらうことが肝心。金光教では、神様と仲良くするのが信心だと考えているんです。

次は、静岡県にお住まいの六十代の女性から頂いたお悩みです。

「近所に住んでいる娘一家のことでご相談があります。先日、娘婿が単身赴任先でうつ病になって帰ってきました。娘は夫に付いて行かなかった自分のせいだと思い、懸命に世話をしていました。その間、子どもの方には気が回らなかったのか、小学四年生の孫娘が風邪をこじらせ、肺炎が一カ月以上も治りません。娘はす

っかり落ち込んでしまい、私も娘一家の先行きが心配で夜も眠れません。娘たちを金光教で救ってやって下さい。教会にお参りさせたいと思いますが、どうすればよいでしょうか」

ああ、いろんな問題が一度に重なって、本当に大変ですね。体のことも、仕事のことも、これからどうなるんだろうかと、あなたが心配される、それは無理もないことだと思います。子どもが苦しんでいたら、親もやっぱりつらいですもんね。ですからこれは、娘さん一家だけの問題じゃない。親であるあなたも含めて、みんなで助かっていかなければならないことですね。

さらに言えば、この問題は、神様にとっても

他人事ではないんですよ。先程も言いましたけれども、神様は私たち人間の親なんですから、あなたが娘さんたちのことで心を痛めているのと同じように、神様もやっぱり、親としてどうか助かってくれよと、願いを掛けて下さっているんです。

娘さんたちに参拝させたいというご相談ですが、どうでしょうね。まずあなた自身が参拝されてはいかがでしょうか。

金光教の教会は、全ての人に向けて開かれているんです。信者であるとかないとかも関係ない。人間はみんな、神様の可愛い子どもなんですから。

初めて参拝するからといって、別に何の準備も手続きも必要ありませんので、いつでも直接

お参りされたらいいんですよ。

親元に帰るのに「帰ってもいいですか」なんて断りませんよね。それと同じことです。「ただいま」というような気持ちで、教会に入ってください。教会の先生は、あなたの悩みをじっくり聞いて、一緒に神様に祈って下さいます。そしてきくと、あなたが帰る頃には、来る前のザワザワした気持ちが消えて、心が元気になっていると思いますよ。そんな手応えを、ぜひ娘さんたちに話してあげて欲しいんです。そうすれば、娘さんたちも安心してお参り出来るんじゃないでしょうか。

また、たとえお参りには至らなくても、母親であるあなたが、神様を信じてドシンと構えていられるようになったら、娘さん方にとって、

あなたは力強い心のよりどころになるはず  
です。

ま、ほんの少し勇気がいるかも知れませ  
んけど、第一歩は、どうかあなた自身から踏み出  
してみてください。



### 《あなたへの手紙》

第三回 運命って決まっている？／

何がありがたい？

皆さん、おはようございます。兵庫県淡路島  
にあります、金光教志筑しづき教会の地田治美です。

まず初めは、十六歳男子高校生、匿名でミッ  
キー君から頂きました質問です。

「学校で友達と進路の話をしている時、友達  
が『どうせ運命は決まってるからな』と、投げ  
やりな感じに言った言葉が、なぜか妙に頭につ  
いて離れません。

卒業後の進路について悩んでいます。自分  
なりに夢も抱いています。もし運命が決まって

いて、その夢はかなわないと決まっていますと  
したら、努力しても報われないんじゃないかと、と、  
そんなことまで考えてしまいます。

どうなんですか？ 運命って、あらかじめ決  
まっているんですか？」

このような質問です。

ミッキー君、ありがとうございます。

「運命」と言えば、「運命的な出会い」「運  
命のいたずら」といった言葉が浮かんできます  
が、「運命を愛し、運命を生かす」生き方をさ  
れた、金光教の先生がいらっしやいます。

その先生は、幼い頃事故に遭って、両手と片  
足を失います。そのことを苦にして、命を絶と  
うとしたこともあったそうです。

ところが先生は「手が無いとか、足が無い状  
態を不幸せというなら、私は一生涯、不幸せを  
無くすことは出来ません。両手、片足は失った  
けれど、まだ右の足が一本残されています。ま  
だ私には幸せが残されています」と受け止める  
ようになっていけます。

そして、お母さんの計り知れない愛と、あつ  
い祈りに支えられてきたことが励みとなって、  
生きがいを抱き、惜しみない努力を重ねていか  
れました。着物の帯と袴はかまのひもを結ぶこと以  
外は、手伝ってもらわなくても、ほとんど日常  
生活が出来るようになったんだそうです。脇の  
下にお箸やスプーンを挟んで食事をしたり、鉛  
筆を口にくわえたり足に持ったりして、字も書  
いたんだそうです。

右足が有ることを、ありがたいことだと幸せを感じながら生きていかれました。

『運命を愛し、運命を生かす』というのは、

先生の生き方や考え方がつづられた本のタイトルです。その本の中に「運命」についてこう書かれています。

「運命は初めから定められているのではなく、お互いの心のうちから生み出し、創り出していくものだと思います。運命の運は、はこぶ、と読むのですから、運命は定められているのではなく、心で運ぶものだと思います」と、こんなふうに書かれています。

ミッキー君は今、進路についてあれこれ悩んでいるんですね。これから先もまだまだ大きな壁に当たったり、困難に出合うことがあるかも

しれません。運命のせいなのかと心を惑わされることなく、あなたの心で運命を生み出し、創り出して下さい。

心の運び方次第で、幸せを感じたり、ありがたいと思えるようにもなっています。

どうぞ今抱いている夢を大切にして下さいね。そして喜びと感謝の心を大切にしながら、夢に向かって力強く進んで下さいね。

もし、もっと話を聞いてもらいたい、もっと話を聞いてみたいと思うことがあったら、一度お近くの金光教の教会を訪ねてみることもお勧めします。

次は、マミさんという三十代の女性の方からの質問です。

「私は昨年、金光教を信仰している夫と結婚しました。夫に勧められて、金光教の教会へお参りしています。

お参りの方々が、『ありがとうございます、ありがとうございます』と、口癖のように言っています。ありがとうございますのでしょうか？

夫や教会の先生には、今更恥ずかしくて、なかなかストレートに聞けません。教えてもらえますか？」

このような質問です。

ママさん、正直な素直な気持ちをお寄せ下さいましたね。

教会にお参りされる方の中には、病気が治っ

てうれしくありがたくて「ありがとうございます」とお礼を言われている方や、願い通り就職が決まって、お礼のお参りをされている方もいらっしゃるかもしれません。

状況が良くなったり、お願いしていた事柄が成就していくことは、とてもうれしいことで、ありがたいことに違いありません。

けれど、お参りされている方々は、まず、今日のいのちを頂いて、朝、目覚めさせて頂いたこと、そして、いのちを頂いてお参りが出来ることを「ありがとうございます」と、神様にお礼を言われていると思います。

金光教にはこういう歌があります。

「賜びしいのちある　ありて今日も　目ざめ

たり 目ざめしことは ありがたきかな」

「賜びしいのち」というのは、神様から賜った生かされて生きるいのちです。

生かされて生きるいのちを頂いて、朝目覚めさせて頂いてこそ、喜んだり怒ったり、哀<sup>かな</sup>しんだり楽しんだりという人生を歩むことが出来ていきます。

マミさんは夫婦げんかをすることがありますか？

私は時々やっちゃいます。ささいなことなんです：例えば、夫が仕事から帰ってきて、部屋に入って靴下を脱ぐ、その靴下を放り投げたままにしていることに腹を立て文句を言う、言いつ返されてけんかになるとか：でも、けんかが

出来るのも、夫と私、それぞれお互いの今日のいのちがあつてこそなんですよね。

朝、目が覚めて、「ありがとうございます」という「いのちのお礼」が今日一日の始まりです。マミさんも、ご主人や教会の先生と一緒に「いのちのお礼」に取り組んでみて下さいね。





《あなたへの手紙》

第四回 お役に立つとは？／誰もが神様の愛しい子？

皆さん、おはようございます。

南に黒潮香る太平洋が広がる高知県高知市にあります、金光教高知教会の道願正美と申します。今日初めて担当させて頂きます。

まず初めに、香川県にお住まいの明子さんからの質問です。

「私は今年で八十歳になりました。先日、誕生日のお祝いを子どもたち、孫たちにしてもらってうれしい気持ちでいっぱいです。けれども、あることを思うと心から喜べないのです。ある

こととは何かと申しますと、今の私には人のお役に立つことが何も出来ていないという現状です。昨年までは人のお世話をたくさんさせてもらい、周りの人たちに喜んでもらってきました。ところが今年初めに突然の病を患ってからは、人のお世話になりっぱなしの私です。

こんな今の私でも何か人のお役に立つことが出来ればと思うのですが…」

こういう内容です。

明子さんの言われる「人のお役に立つ」ということ。私は金光教の教会で生まれ育ちましたので、小さい時から両親に「人のお役に立つ人になりなさい」とよく言われてきました。ですから五十歳になる今でも人のお役に立つことを

いつも考えています。明子さんも恐らく人のお役に立つことを人生の大切な目標として今日まで歩んでこられたんですね。

明子さんは、自分が高齢で病気になったから、人のお役に立つことが何も出来ないのではないだろうか心配しているようですが、そんなことは決してありません。八十歳のお祝いをご家族皆さんにしてもらったことでも、ご家族の絆に大変お役に立っているのではないでしょうか。

私の教会には、今まで何度も大病を患った八十八歳になる女性の方がお参りされています。

この方は「先生、私は毎日畑で取れた野菜を家の前に並べてその横に座っているだけです。が、たくさんの人が集まってくれて、私と話を

すると楽しい、私の笑顔を見ると元気になると言ってくれます。野菜もたくさん買っていただきます。私の笑顔、そんなにいいですかね」と、いつもそう話しては大笑いして帰って行きます。この方は、体の元気はもとより心の元気も頂いて、笑顔で人と話をすることで人のお役に立つ自分というものを見つけているんですね。

笑顔は誰にでも出来る心の輝きです。その場を明るく和ます力を持っています。明子さんも、どうぞ笑顔でもって元気にご家族や周りの方々と接してみることが心掛けて下さい。明子さんの笑顔が温かい光となって、人のお役に立つことは間違いありません。

続いては、十七歳の男子高校生からの質問です。

「僕の親友は、金光教の教会に住んでいます。今までに何回か誘われて教会のキャンプやバザーに参加させてもらいました。その折に親友は、『人間はみんな神様の愛しい子どもなんだ』とよく話してくれます。ところが僕にはそうは思えません。今まで世の中にはたくさんの方々の命を奪えば自分も死刑となつて死ぬことが出来る、といったような自分勝手な考え方で起きた事件などもありました。僕は、そんな事件のことを考えると、親友の話に納得できないのです。どんな罪を犯した人でも、みんな神様の愛しい

子どもなのでしょうか？」

こういう内容です。

質問ありがとうございます。あなたの純粋な思いが真つすぐに伝わってきます。私にはあなたと同じ十七歳の息子がいるんですが、息子もあなたと同じ思いを私に言っていました。あなたの思いは無理のないことなのかも知れません。私にもその気持ちはよく分かります。

でも、人間誰一人として罪を犯すことを望んで生まれてきた人はいません。

「人はみんな、この世に神様の分身として命と神心とを授かっているのである。そして、誰であろうと神様の働きを現すことが出来る」というのが金光教の考え方です。神心とは、可哀

想にと思う心そのものであり、思いやりや慈しみの心なんです。

さまざまな罪を犯してしまう人たちは、人を思いやり、慈しむという人間として生まれ持った神心が、自分中心の感情や欲望に負けてしまったのではないのでしょうか。もしも罪を犯してしまう前に、神心を引き出してくれる誰かがそばにいてくれたら犯罪は起こらないのかもしれませんが。

どうぞ「人間はみんな神様の愛しい子ども」という思いをもって生活してみてください。あなたの生まれ持っている神心がより大きくなって、あなたのご家族や友人、周りの人たちをさらに広く包み込んでいくと思います。

また、そのことについて教会に住むあなたの

親友と一度ゆっくり話し合ってみてはどうでしょうか。きっとより一層の友情が深まっていくと思いますよ。



《こころの散歩道》

第一回 おじいちゃんは神様だった  
ね

いやあ、びつくりしました。偶然ってことはあるものですね。

先日、僕は出張で新幹線に乗る予定だったのですが、指定の列車の時刻よりずいぶん早く駅に着いたので、すいていたら乗ろうかな、なんて軽く考えて自由席の列に並んでいたんです。思ったよりたくさんの人が並んでいましたね。やっぱり座れないかなあ、と思いながら後ろを振り向いたら、もう僕の後ろにもたくさんの方が並んでいました。

よし、もう指定の列車まで待とうと決めて、

列を離れようとしたら、僕の後ろに並んでいた人に声を掛けられました。なんと、大学時代の友人だったんです。

大学時代は結構、親しくしていて、卒業してからもしばらくは時々会ってちよつと一杯、なんてこともあったやつなんです。それから何となく会わなくなつて、本当に久しぶりの再会となりました。新幹線は満員でしたが、乗り込んで、立ったまま、二人で話しながら「またこれから会おうや」と別れたんです。

たまたま早く駅に着いて、たまたま自由席に並んで、たまたま後ろを振り向いただけなんだけど、なあんて考えると、ちよつとしたことで運命が変わることもあるよな、と思いました。

実は、うちの父と息子にも、すごいたまたまっ

ていう話がありましたね。

もう三十年程前のことです。僕の息子が一歳の誕生日を迎えたすぐのところなのですが、当時、息子はヨチヨチ歩きを始めたばかりで、一番目が離せない時期でした。

息子は階段が大好きで、すぐ二階に行きたがりました。一人では危ないので、必ず誰かが手をつないで階段を上がり、上がってしまっても危ないので、上がりきった所に柵を付けてありました。

ある日の夕方、妻は二階で洗濯物を畳みながら、息子を遊ばせていました。当時の我が家は昔風の建物で、二階には長い廊下がありました。妻はふすまを開け放して、廊下を行ったり

きたりして遊んでいる息子を見ながら、たくさんの洗濯物を畳んでいたのです。

その時、息子が階段のそばまで行ったので、妻は手を止めて見守っていたのですが、それも柵から離れないので、危ないと思って、走り寄ろうとしたら、どうした弾みか、その大切な柵が外れて、息子が真つ逆さまに階段から落ちてしまいました。

「あっ！」と思ったけれど、階段のてっぺんから、落ちていく我が子を見ているしかなかった、スローモーションの映像のようにゆっくり弧を描いて落ちていった、ゴロゴロと階段にぶつかりながら落ちたのではなく、階段の上をフワッと飛ぶように落ちていって「もう駄目だ」と思った、と妻は言っていました。

ところが、その時、何とも不思議なことに、階段の下を同居している僕の父がたまたま通り掛かり、落ちてくる子どもを両手で受け止めた、待ち構えていたように、子どもをすっぽりと胸の中に受け止めたというのでした。

息子は泣きもせず、さぞ楽しかったとでもいうように「キャッ、キャッ」と笑い、父もニコニコして腕の中の孫を見て笑い、何もなかったように、時は過ぎていきました。一つ間違えれば、大騒ぎになったであろう時間が、何事もなく静かに過ぎていったのでした。

夜になって妻からその話を聞いた僕はびっくりし「良かった、良かった」と言い合い、「親父はすごいな」と何度も何度も語り合ったのでした。父はそのことについて多くを語らず、ニ

ニコとしながら「あの時は本当にびっくりしたなあ、良かったなあ」と言っていただけでした。

でも、後から考えても、どうして父が階段の下をたまたま通り掛かったのだらうと、僕たちはその話が出るたびに不思議がりました。あまりに出来すぎた偶然だと。それにうちの父は、あまり丈夫な人でなく、当時は六十代半ば。しかも右腕は若いころの病気がもとでひじから下が曲がったままなのでした。そんな体で、よく落ちてくる子どもを受け止められたものだ、とも不思議がっていました。

その父も亡くなり、階段から落ちた息子にも子どもが生まれたころのこと。妻は古い本棚を

整理していて、父の一冊の日記帳を見付けました。それはちょうど、あの階段から落ちてくる息子を、父からすれば孫を、受け止めた時のことが書いてある日記帳でした。

その日を見付けて、読んでみると、そこには「声を聞いて駆け付けたら、孫が階段から落ちてきた、私の腕にすっぽりと入ってきた。神様のおかげ受け、御礼おんれい」と短く淡々と書かれてありました。

妻はあまりの突然に声も出なかった、ぼうぜんと息子が落ちていくのを見て立ちすくんでいた、と言っていたのに、父は声を聞いたと書いていて、じゃあ、大きな声をあげたのかなあ、と妻は言い、それにしても、声を聞いて駆けつけて間に合うものだろうか、とますます不思議

な思いになりました。

何かの声に導かれて、父が階段の下をたまたま通りかかった、そしたら可愛い孫がすっぽりと胸に入ってきたという、その話を思い出すたびに、僕たちは息子に言い聞かせるのです。

「君にとって、おじいちゃんは本当に神様だったね」と。そして僕たちは自分に問い掛けてみるのです。あんなふうに、大事な子どもや孫を助けられる自分になれるだろうか。





## 《こころの散歩道》

### 第二回 美しい心が育ちますように

「お父さん、本当に名前が変わっていい？」

私は、長女からの電話で思い出した。「ああ、そうか。今日、入籍するって言っていたっけ」。

今さら妙なことを言うなあ、と思いつながら「もちろん、いいよ」と答えた。結婚式の三カ月前だ。結婚して名前が変わり、新しい家庭を築いていくことへの不安を感じていたのだろう。

結婚式の当日、私は娘にそつと耳打ちした。

「義子、名前が変わっても、お父さんとお母さんの子どもであることに変わりはないよ」

長女は「こんな時に泣かせるようなこと言わないで」と、うれしそうに答えた。

結婚披露宴の最後に、長女が「お礼の言葉」

を読み始めた。バックミュージックは「キラキラ星」。ずっと前、ピアノ発表会で、長女が初めて妹と弟、三人一緒に演奏した曲だ。

「感謝の手紙なんて恥ずかしくて絶対嫌だと言っていました。意地っ張りな私は、このよな場をお借りしないと素直になれないと思います、読ませて頂きます」

「お母さんへ。気温が急に変化したり、風邪が流行っていると必ず『元気ですか』と、かしまったメールをくれるお母さん。体調を崩すと誰よりも心配してくれ、私の変化に誰よりも早く気付いてくれ、話を聞いてくれ、私を励ま

してくれました。私は意地っ張りなので、つい  
つい生意気な口を利いたり、強い口調で反抗的  
な態度をとってしまいましたが、本当はすごく感  
謝しています。家族思いで、優しい雰囲気と、  
たまに見せる天然ボケっぷりと、家族一涙もろ  
く、感激屋さんの、心の奇麗なお母さん。いつ  
も私の支えになってくれてありがとう」  
そんな長女の言葉を聞きながら、私は、長女  
が小学生だったころのことを思い出した。

私は妻に

「義子、このごろ元気がないみたいだけど」  
「ええ。友達が、義子のこと、無視している  
らしいの」

「へえ。幼稚園からずっと仲が良かったのに

：

「今は我慢しているけど、ずっと、泣きなが  
ら帰ってきていたのよ」

小学二年生の一学期末、それまで学校から一  
緒に帰っていた友達が、一緒に帰ってくれなく  
なったのだと言う。「気をつけて見守ってあげ  
てね」と妻に頼み、幸い、三学期には一件落着  
いたようだった。

長女は三年生になって、その時のことを、「な  
かまはずれはもういやだ」と題する作文に書い  
た。

「友達と一緒に帰ろうと言ったら、知らんぷ  
りをされました。聞こえないのかなあと思い、  
また行って二人と一緒に帰ろうと言いました。  
また知らんぷりされました。はつきり言ったは

ずなのに、聞こえたはずなのになあと思っ

その後をくつついていったら、私の方を振り向  
かずに、今まで仲良かった二人の友達がバーツ  
と走って逃げて行きました。つらくて、泣きな  
がら帰ってきました。家に帰ったら、お母さん  
がなぐさめてくれました」

作文には、この他にも、仲間外れにされて、  
つらく悲しい思いをしたことがいくつも書かれ  
ていた。

私は、長女がこんなにも心を痛めていたのを  
知り、まだ小さいからさほど深刻な事態には至  
らないだろうと、軽く受け止めていたのを反省  
させられた。妻がずっと寄り添い、慰め、励ま  
し、祈り続けてくれたおかげで、長女はつらい  
時期を乗り越えることが出来たのだ。

それから何年かして、私は、長女が小学五年  
の時に書いた作文を読んだ。友人のあきちゃん  
が、以前は仲の良かったみさとちゃんから無視  
され、ある日、殴る、蹴るの大げんかをしてい  
るところに、長女が出くわしたのだった。作文  
には、次のように書かれていた。

いつもは仲良くしてて、内緒話もしていたあ  
きちゃんとみさと。あんなに仲良かったのに  
と思うと、涙が出てきました。

席についても泣いていると、みさとから「な  
んで泣いたん？」と聞かれました。

「あきちゃんとみさとが可哀想だった。いつ  
もあんなに仲良かったのに……」

泣きながら答えると、

「そこまでして…。ありがとう。仲直りをするから…」

と言って、みさとも泣いていました。

そして、あきちゃんと二人で抱き合って、仲直りをしていました。良かった…。

作文の最後には、担任の先生のコメントが赤ペンで添えてあった。

「友達の悲しみを一緒に悲しむ。友達の喜びと一緒に喜ぶ。そんな美しい義子さんの心が、二人の気持ちを動かしたのです」

長女は結婚した次の年、元気な男の子を出産した。私は、生まれたばかりの我が子におっぱ

いをあげている長女を見て、しみじみ思う。

「お母さんがそうであったように、今度はあなたが、わが子に寄り添い、心配し、慰め、励まし、祈り続けていくんだよ。子どもと一緒に、美しい心を育み合ってね」



《こころの散歩道》

第三回 「サンキュー」から学んだ

「おはよう」

「おはよう！」

「おはようございます！」

朝の散歩中、人とすれ違う度に交わすあいさつはとてすがすがしいものだ。

三年前から犬を飼い始め、朝の散歩がいつしか日課になった。すると、意外にも朝の散歩をしている人たちが多いのに驚いた。

最初のうちは、タイミングや声のトーンなど戸惑いもあったが、そのうちに慣れてきて、お互いに気持ちよくあいさつが出来るようになってきた。また、自転車に乗って学校に向かう学

生たちは「おはようございます！」と、明るく爽やかにあいさつしてくれるので、こちらも身の引き締まる思いがする。

そんな中、六十歳くらいであろうひげを生やしたおじさんは、毎朝決まったところですれ違ふのだが、あいさつは全くしないし、視線もこちらに向けようとしない。初めのうちは「おはようございます」とあいさつしていたが、苦虫をかみ潰したような顔をするので、こちらも段々嫌な気がしてきて、何も言わずにすれ違ふだけになった。

ところが気になるのだ。どうして朝から不機嫌そうな顔をして散歩なんかしているのかな？嫌なら家でじっとしていればいいのに……。それとも、体がどこか悪いのかな？心配事でもあ

るのかな？ そう思ってあいさつをしてみる  
と、やはり無視だった。あーあ、それにしても  
こちらまで、朝の爽やかな気分が吹き飛んでし  
まうじゃないか！

今日の出張だった。月に一度のことで、もう  
十年になる。仕事を終え、帰りの飛行機に乗り  
込んだ。すると、隣の席に体の大きな外国の方  
が座ってきた。外国人と隣り合わせで座るのは  
初めての経験だった。

離陸後しばらくして、飲み物のサービスが始  
まり、私の所にもやってきた。私はホットコー  
ヒーを頼んだが、体の大きな彼が邪魔をしてコ  
ップが届かない。すると、彼が受け取って私に  
渡してくれた。私は思わず「サンキュー」と言

った。それに対して彼は「どういたしまして」  
と流ちょうな日本語で返してきたのだ。

その後、彼としばらくの間おしゃべりを楽し  
んだ。

「日本語お上手ですね」

「日本に来て三年になります。ポルトガルか  
ら仕事で来ています。ポルトガルのこと、知っ  
ていますか？」

「うーん、カステラ…ですか」

すると彼はちよつと悲しそうな顔をして「ポ  
ルトガルには、あのお菓子は無いんですよ。あ  
れは日本で生まれたお菓子です」

「あつ、ごめんなさい」

「いいんです、皆さんよく言われるから慣れ  
ました」

「ん、では首都がリスボンですよ」と言う  
と「よく知ってますね。僕の出身地はリスボン  
の隣町なんですよ」とうれしそうに教えてくれ  
た。

それから彼は言いにくそうに「さっきあなた  
は、『サンキュー』って言ったけど、ポルトガ  
ルは英語じゃなくてポルトガル語なんですよ」  
と言った。私は恥ずかしくなって「ごめんな  
さい」と小さな声で謝った。

すると彼は慰めるかのように「もちろん英語  
も分かるから良かったんですよ。でも、ここは  
日本なんだから日本語でいいですよ」と言っ  
てくれた。「あつ、そうか、ありがとうでよか  
ったんだ」と納得して言うと、彼は「『ありが  
とう』っていい言葉ですね。漢字で書くとまた

いいね。有ることが難しいと書くんですね。キ  
セキってことですよね。今日はお話出来てあり  
がとう」と、にっこり笑った。私も「色々と教  
えてくれて本当にありがとう」と言っ、固い  
握手をして彼と別れた。

空港から電車に乗り換えた後も、心地よさが  
残っていた。ポルトガル人の彼と、言葉だけ  
なく心が通じたからだろう。その時、なぜか毎  
朝の散歩のシーンが頭をよぎった。

あのあいさつをしないおじさんとは、言葉は  
通じていても心が通じていないんだ。それに自  
分はただあいさつを押し付けていただけじゃな  
いだろうか。きっと形だけのあいさつだったか  
ら、受け入れてもらえなかったんだ。

その翌日から、毎朝そのおじさんとすれ違う度に、静かに「おはようございます」と挨拶をし、おじさんの後ろ姿に「どうか良い一日が過ぎますように」と祈りながら見送るようになって。おじさんからは相変わらず何も返ってこない。でも私は構わず、祈りながら心を込めてあいさつを続けた。

そんな日々が半年近く過ぎたある日のことだ。飼い犬が脇道にそれて、においをクンクン嗅いでいた時、背後から声を掛けられた。

「おはよう。可愛いワンちゃんだね」

振り返ると何とそのおじさんだったのだ。

おじさんはにっこり笑って立ち去っていった。私は慌てて「おはようございます。ありが

たうございます」と言ってみ送った。その次の日から、お互いあいさつが交わせるようになったのは言うまでもない。

「おはようございます」

どうか良い一日が過ぎますように。





## 《こころの散歩道》

### 第四回 信じる力

ある新聞に次のような見出しがあった。「四歳児がヒーローに変身！ 強盗退治」というものの。

アメリカでのことだった。ある晩、アパート暮らしの一家に、二人組の強盗が押し入り、五歳と一歳の女の子に拳銃を突きつけ、母親に金を要求した。

ところが、この悪者たちに立ち向かったのが、この一家の四歳の男の子。隙を見て事件現場から抜け出した彼は、大好きなテレビ番組のヒーローが身にまとう真っ赤なコスチュームに着替え、また現場に舞い戻って「僕の家族から離れ

ろ！」と声を張り上げた。そして「ヤー！ ヤー！」と叫びながらプラスチック製の剣を振り回したのだ。不意を突かれた男たちは、母親が投げ出した現金などを奪い、慌てて退散。家族は無事だったという。

赤、青、黄色、ピンクに、緑と、五人のヒーローが変身し、悪者をやつつける、あの日本生まれのヒーロー番組は、アメリカでも大ヒットしているのだ。

一歩間違えれば、恐ろしいことになったかも知れないこの出来事だが、それにしても「信じる力」の強さに感心させられる。四歳だからこそ出来たことと、つい思ってしまう私たち大人は、一体これほど信じられる何かを心の中に持っているだろうか。

長女がまだ三歳だった時のこと。手をつないで、わが家の急な階段を一段また一段と二階から一緒に降りてきた。私が一番下まで来た時、

後ろから「ストップ！」と大きな声。振り向くと、本人は私の目線ほどもある五段目辺りに立ち止まり、いきなり私に向かってダイビングしてきた。スローモーションのように映る子どもの顔には白い歯がこぼれている。怖いもの知らずの小さなスタントマンを、私は体全体でしっかりと抱え込んだ。

「ビックリするじゃないか」と言っても、キヤッキヤツと笑いが止まらないようだ。

「怖くないのか」と聞くと、「すごいやろ」と自慢顔。恐怖心が全くないようだ。この子は

私を信じている。信じ切っている。その信頼にどんなことがあっても応える私。何があってもこの子を受け止めてやる。

中学二年生になった長女が、二学期に入り、携帯電話が欲しいと言いつ出した。「みんな持っている」というこの手の脅しには乗るまいと、妻も私も決意しているのだが、「欲しい、欲しい」の連発である。娘も段々と、暗く反抗的になってくる。親の気持ちをもとに理解して、クラブ活動にも打ち込み、家庭で明るくなっても、raithたいと、話題をあれこれ変えてみるのだが、まったく効果がない。

それどころか、そんな娘の姿に、妻まで頭が血が上り、叱りつけるようになる。

私もずーっと黙っていたが、とうとう昨晚猛烈に叱りつけた。

「いい加減にしろ！ 買わないと言ったら買わないんだ！」

娘にすれば突然のことに納得出来なかっただろう。地震・雷・火事・親父。親父は突然怒り出す。いい加減にして欲しいのは、むしろ娘のせりふかも知れない。

朝になっても、昨晚からの気まずい雰囲気は続いていた。日が経てば解決するだろうとは思っている。何かの間違っていているような気がしてならない。ところがそれが分からない。

私が携帯を持たせない訳は、青少年を取り巻

く社会問題とも関わっていた。携帯を持った彼らが、犯罪に巻き込まれるケースが年々増えているという。彼らは善悪の判断がつかないまま、危ない世界に気軽にアクセスしてしまうというのだ。

「私のころは、こんなもの無かったのに」  
そんな思いも手伝って、携帯は必要ないという考えに、凝り固まっていた。

しかし、間違いのものはそこにあったのだ。  
「待てよ…、私は自分の子どもを信じてないじゃないか…」

私は、何にもまして大切なことが、もの見事に抜け落ちていたと、ようやく気が付いた。  
振り返ってみれば、ここまで模範的な親とは決していえない私たちである。けれどもこの子

を育てるために、その時その時、精いっぱい信

じてやってきた私たちでもあったはずだ。そう  
思うと、この子を信じてあげることだけが、私  
が出来たたった一つのことだと思った。

こちらに背中を向けて座っている娘。

「お父さんが間違っていた。あなたを信じて  
いる」と私は心から言えた。

真っ赤なコスチュームを身にまとうて変身す  
れば、強くなれると信じた男の子は、信じるこ  
とで勇気をもたらった。大好きなパパを信じて飛  
び込む小さなスタントマンは、信じることで自  
分の全てを任せていった。そして掛け替えのな  
い我が子を信じてなかった子煩惱なお父さん  
は、信じることの大切さに気付き、視界が開け

た。

声なき声に心の耳を傾け、形なきものに心の  
眼を注ぐ。神仏を信仰するといっても、所詮説  
明のつかぬこと。結局のところは、信じること  
がその答えとなる。また信じるその心にこそ神  
仏も響き合うのではないだろうか。

通りかかった小さな祠やお堂にも、そっと手  
を合わせ、心を整え念じてみる。

「信じる力」を信じてみたい。



《こころの散歩道》

第五回 今日が親切にしよう

私は、大切な仕事を任せられ、出張することに  
なった。出張先までは、私鉄と新幹線を乗り継  
ぐ長距離移動だ。まずは、私鉄の特急電車に乗  
り込んだ。

いつも混んでいるのに今日は席が空いてい  
る。「ツイてるかも」。そう思って腰掛けた途  
端、子連れの妊婦さんが乗り込んで来た。すぐ  
に席を譲ると、お母さんの隣に腰掛けた女の子  
が「おじさん、ありがとう」と言ってくれしそ  
うにほほ笑んだ。「こんなに喜んでくれるなん  
て…。それにしてもいい気持ちだ。そうだ、今  
日は人に親切にしよう!」。そう思った。

人に親切にすれば、任せられた仕事も首尾良く  
いくような気がした私は、心の中で祈った。「ど  
うぞ、親切にするチャンスに恵まれますように  
…」と。

新幹線の駅には、早く着き過ぎてしまった。  
乗るつもりになっているのは各駅停車の「こだ  
ま」。その出発までに、一列車、ホームで見送  
ることになりそうだ。私は、移動時間を利用し  
て、今日の仕事の最終確認をするつもりだった。  
だから、早く目的地に到着する「のぞみ」では  
なく、「こだま」に乗ろうと決めていたのだ。  
程なく一つ前の列車が到着した。ドアが開く  
と、ビジネスマンたちが、慌ただしく下車して  
行く。その流れが途切れ、もう降りる人はない

のかと思った時、足元もおぼつかない様子のおじいさんが、杖をつきつき、一人でホームに降りてきた。

チャンス到来である。私は、勢い込んで「こちらに、エレベーターがありますよ」と、声を掛けた。

ところが、そのおじいさん、こちらをチラリとも見ないまま、一直線にエレベーターに向かって、私の目の前を横切って行ってしまった。ささやかな思いやりの気持ちを拒絶されたようで、私にはシヨックだった。

私は、おじいさんに拒絶されたその訳を探す。「よく聞こえなかったのか?」「いつも利用している駅なのだろうか?」「それとも…?」。

「そうか、そうかもしれない。私は、おじい

さんのために、ではなく、自分の満足のために、親切を装うようなことをしていたのではないか。そんなまやかしだったから、おじいさんは、受け入れてくれなかったに違いない」。そう思った。

それから数分後、私は「こだま」に乗り込んだ。乗客もまばらなので、落ち着いて仕事の準備が出来そうだ。

ところが、私が座席に腰掛けようとした時、四十代半ばと思しき女性の大声が、車内に響き渡った。私の後から乗り込んできたその女性は、通路を歩きながら携帯電話で話しているのだ。「なんて非常識な!」。怒りが沸き起こってくる。

「仕事の準備をしなくては……」と思い直して深呼吸した私の耳に、否応なく聞こえてきたのは「もしもし、お迎えお願いね。今『のぞみ』に乗ったから。ええ、〇時〇分到着よ」という言葉だった。

「この女性ひと、勘違いしてるんだ。これは『こだま』なのに。このままだと、電話の相手は、一時間以上も待たなきゃいけなくなるぞ。教えてあげようか……。いや、待てよ。『盗み聞きなんかして！』って逆ギレされたら、不愉快だよなあ……」

ホームで発車ベルが鳴る。その音は、窓越しに車内にも届いた。

「あなた降りなさい！　これは『こだま』ですよ」

気が付けば私は、その女性の方を振り向きながら、大声で叫んでいる。なぜ自分がそうしているのか、自分の行いでありながら、何かにそうさせられたような妙な感覚に、私は内心、戸惑っていた。

一方、その女性は、あつげに取られたような顔をして、無言のまま大急ぎで出口へ向かい、車内から姿を消してしまった。

列車は、滑るように動き始める。「あゝあ、やっちゃったよお。きつと、変な人だと思われるな」と、後悔し始めたその時、駅のホームから必死で私を探し、深々と頭を下げながら「ありがとう！」と、聞こえない声をあげて列車を見送る女性の姿が、私の目に飛び込んできたのだった。

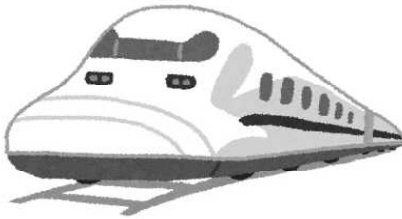
「とにかく、良かった」。私の祈りに応ずるように、神様が私に、親切をさせて下さったように思えた。うれしく、爽やかな心持ちに包まれながら、私は思った。「親切が成り立つにも、神様の働きが必要なのだ」と。

「困っている人がいることに気付き、出来ることを思い付いて、言葉や行動にしていく。そしてそれを、相手が笑顔で受け止めてくれる。そうしたことがあつて初めて、私は、人に親切をすることが出来るのだ。簡単なようだけれど複雑で、不思議な働き。それを、神様は、この私に現して下さったのだ…」

「おっ、仕事、仕事」と、我に返った私は、窓の方へ目を向ける。車窓を流れていく田畑や

街の景色が、こう私に語り掛けてきた。

「あなたも、あなたの周りの人たちも、みんな素敵な力を授かつて、今生きているんだよ」と。





《天地は語る》

第一回 心配を神様に預ける

ナレーション

金光教の教祖である、金光大神の教えに次のようながあります。

「人間であるから、生きている間は先々のことを考えもしようし、心配の尽きる時はあるまいが、それがみなおかげになれば、心配はあるまい。心配は、信心すればみなおかげになる。心配は体に毒、神に無礼である。心配する心を神に預けて、信心する心になれよ。おかげになる」

今日は、この教えについて先生にお話を伺います。

聞き手 先生、こんにちは。

先生 こんにちは。

聞き手 今日は、この教えについてお話を聞かせて下さい。

先生 はい、分かりました。これは、心配事についての教えですね。私たちについて、つつい先のことを考えて不安になったり、心配が膨らんだりして、夜も眠れないとか、食事ものどを通らないことがありますよね。

聞き手 ええ、そうですね。私も、ちょっとしたことでも心配になり、なかなか寝付けないことがよくあります。

先生 でも、そんな日が続くと体を壊します

よね。私たちの体は、神様が整えて下さった食べ物や水や空気といった、天地のお恵みを頂いて作られています。

ですから、この体は、神様からの賜り物なんです。その体を心配や不安で壊してしまうことは、神様からせっかく頂いたものを台無しにしてしまうことです。ですから、教祖様は、「心配は体に毒、神に無礼である」とおっしゃるんです。

でも、体に悪いといくら分かっているけど、心配や不安になる心を自分の力でどうすることも出来ません。心配しない方がいいに決まっていますが、だからと言って、心配をしない生き方が

すぐに出来るものでもありませんしね。

**聞き手**

そうですね。心配事って、次々出てきて、私の心を苦しめるんです。

**先生**

だから教祖様は「心配する心を神に預けて、信心する心になれよ」とおっしゃるんです。

**聞き手**

実は私、今、息子が通っている小学校のPTAの役員をぜひやって欲しいって頼まれているんです。でも、人前で話をするのが、私、大の苦手です。それで、やっぱりこれは、お断りをしようと思っていたんですが、周りのお母さんたちが「大丈夫、大丈夫」とか言って、はつきり断れないままになって

いるんです。

先生 そうなんですか。それで、役員を引き受けることに…？

聞き手

ええ…。なんだか、無理矢理、やらさ  
れていると思うと、少し腹立たしい思  
いもしますし、それに、皆さんの前で、  
きちんと話が出来て、うまくやってい  
けるだろうかと思うと、心配で今でも  
心が苦しくなってくるんです。

先生

それはつらいですね…。  
だから、そういう時にこそ、この教え  
のように「心配する心を神様に預けて、  
信心する心」になればいいんですよ。

聞き手

ええ、そうだと思うんですが、どうす  
れば、心配する心を神様に預けること

が出来るんですか？

先生 そうですね。それには、まず、神様の  
願いやお心を分かせてもらうことだ  
と思いますね。

聞き手

神様のお心ですか…。

先生

ええ、そうです。神様は、私たち人間  
を、我が子のように慈しみの心で、温  
かく見守って下さっているんです。そ  
れは、あなたが、息子さんのことを大  
切に思い、元気に大きく育てて欲しい  
と願っておられる思いと、同じ思いな  
んです。

聞き手

ちよつと考えてみて下さい。

先生

はい。  
あなたが息子さんを大切に思う親心の

中には、少しぐらいつらいことや苦しいことがあっても、それに負けずに乗り越えていける、強い心を身につけて欲しいという願いがありませんか？

聞き手

はい。

先生 スポーツでも、毎日、ランニングをしたり、筋力トレーニングをしたりするでしょう。

聞き手

ええ。

先生 息子さんが、厳しい練習をしていた時に、「そんなつらくて苦しい練習は、しなくてもいいわよ」なんて、言わないでしよう？

聞き手

ええ、そうですね。強くなるには、

厳しい練習も必要ですからね。

先生

そうですね。それと同じ思いで、神様は、あなたの成長も願って下さっているんです。

P T A の役員も、その一つなんですよ。役員をすることで、少しでも、人前で話す練習をして欲しい、自信を持てるように育って欲しい、と願って下さっているんだと思うんです。また、その役目を通して、世の中のお役に立って欲しいとも願って下さっていると思います。そうした神様の願いや思いに心を寄せることで、心配の種になっている、P T A の役員に向かうあなたの心も少し変わるかもしれませんよ。

聞き手

そうですね。先生がおっしゃるように、

先生

私に育つて欲しい、役に立って欲しいと神様から願われていると思うと、何だか元気が出てきますね。

それが結果的に、心配を神様に預けることになっていくんですよ。

神様にお願ひするのでも、失敗しませんようにと、心配を抱えてお願ひするのではなく、どうぞ、このことを通してお育て下さい。そして、お役に立たせて下さいとお願ひをしていく願ひ方もあると思うんですね。

すると、もっと元気な心でそのことに当たっていきけるのではないのでしょうか。

聞き手

はい。よく分かりました。これから心

掛けてみます。先生、今日は、ありがとうございました。

先生 はい、ありがとうございました。

ナレーション

「人間であるから、生きている間は先々のことを考えもしようし、心配の尽きる時はあるまいが、それがみなおかげになれば、心配はあるまい。心配は、信心すればみなおかげになる。心配は体に毒、神に無礼である。心配する心を神に預けて、信心する心になれよ。おかげになる」

今日は、この教えについて、先生にお話を伺いました。

《天地は語る》

第二回 あなたこそ大丈夫ですか

ナレーション

金光教の教祖である、金光大神の教えに次のようなものがあります。

「我情我欲を放して真の道を知れよ」

今日はこの教えについてのお話です。

聞き手 先生、今日の教えですが…。

先生 はい。まず「我情我欲を放して…」と

いう言葉ですが、我情は「ワレのナサケ」と書き、我欲は「ワレのヨク」と

書きます。「放す」は、お話しをする

の「話す」ではなく、手放すの「放す」

です。そして我情我欲というのは、自

己中心的な欲望のことです。「我情我

欲を放して真の道を知れよ」というこ

の教えは、短い言葉なんです、伝え

ようとすると意味は、大変大切なことを

言っていると思っています。

聞き手

「我情我欲」とか「真の道」だとか、

何だか難しそうですが…。

先生

そうですね。我情我欲は、あらゆる宗

教が唱える「人間の苦しみの根っこに

あるもの」と言えるでしょうね。言葉

こそ違いますが、共通のテーマだと思

います。

聞き手

どう理解すればいいのでしょうか？

先生

結論から言いますと、かたくなに凝り

固まった自分がある。これが我情我欲

聞き手 えーっ！

ですね。そして、そのかたくなな自分を解き放すことで自分に変化を与え、

先生 ところが本人は何事もなかったかのよう  
に登校したんですね。

新しい価値観を発見し、扉が開かれ、

聞き手 大丈夫だったんですか？

そこに出来た道を歩み始める。これすなわち「真の道」ということになりま  
す。

先生 その事故を、知り合いの方がたまたま  
見ておられ、学校へ通報して下さり、

聞き手 そんな簡単にいくのでしょうか？

先生 先生が本人に確認すると「ぶつかって  
飛ばされた」というので、急いで、お

先生 難しく感じるかも知れませんか。例え

ば、こんな話があります。

す。  
本人はとにかく遅刻するといけな  
いか

聞き手 はい。

先生 私の教会にお参りする親子の話です。

ら「大丈夫」と言つて、現場からサ  
ー

中学三年生の娘さんが、いつものよう

ッと学校へ行つたというんですね。

に自転車で登校したんですが、その途

聞き手 軽く済んで良かったですねえ。

中で交通事故に遭つたんですね。

先生 ええ。その日の夕方に双方が警察署に

出向いて事情を話すことになったんですね。相手の方は三十代の女性の方でした。娘さんの方は、お母さんが付き添われました。ただ、その時は娘さんも気が張ってて、大丈夫と言っていたようですが、晩になって首が痛いと言出し、翌日病院で診てもらったことになったんですよ。

聞き手

やっぱりそういうことってあるんですね。

先生

あくる朝、相手の方に、一応このことを電話で伝えると、「一度そちらへごあいさつに伺いたい」とおっしゃり、会社の昼休みに、お宅へお見えになったそうです。

聞き手

それでどうなったんですか？

先生

「この度はご迷惑をお掛けしてすみませんでした。お嬢さんはどうですか？」と随分、緊張気味にごあいさつ下さったそうです。

聞き手

そうですねえ。

先生

それに対してお母さんは、こうおっしゃいました。

「昨日は大丈夫と言っていたのに、後になってこんなこと言ってごめんない。私も事故の経験があるけど、後々嫌なものだし、気持ちが悪く落ち着いたかなど思っていたの、あなたこそ大丈夫？」と話されたんだそうです。

聞き手

「あなたこそ大丈夫？」と声を掛けら



れたんですか!? ちょっとビックリしました。

先生

ええ、そうなんです。交通事故を起こすと、双方が互いに主張し合い、被害者感情が増し、相手を責め合うことが往々にしてありますが、このお母さんは、相手の方に「大丈夫?」と声を掛けられたというので、私もどうしてこのような心境になれたのかと思い、聞いてみたんですね。

聞き手

私も興味あります。  
そのお母さんはね、こうおっしゃってました。

「娘も一つ間違えれば命を落としていても不思議でないところを神様のお守

りを頂いて、何事もなかったかのようにしてくれているのに、もうこれ以上

何を望む必要がありますか。自分前に事故を起こして苦い経験をしており、いらぬ感情は捨てて、あの時の経験から、おそらくこの方も心苦しゅうと思うと、この人に早く立ち直ってもらいたいと、自分のことのように心配になった」とおっしゃってました。  
娘さんが元気であると言うことと、事故の苦い経験が、相手を責める気持ちを取り払い、相手を慈しむ気持ちへと変わっていったようです。まさに我情我欲を放せたんだと思いますね。

聞き手

そういうことが背景にあったんです

ね。

先生

よく聞いてみると、その三十代の女性は、五歳と二歳の二人のお子さんの母親だということで、それを聞いて、こ  
うもおっしゃったそうです。

「あなたが、いつまでもつらそうな顔をしていると、お子さんも『どうしたのかな』と心配すると思いますよ。起きてしまったことは仕方がないから、後は保険会社にお任せして、元気な顔をお子さんに見せてあげてね。そして、あなたも私もこれから気を付けましよう」とおっしゃったそうです。落ち込んで  
いる相手の方も「そんな優しい言葉  
を掛けて頂いて…」と、ホッとされ

聞き手

たようです。

交通事故って話がこじれて難しいことになる  
とばかり思っていました。全く違いますね。

先生

この話を聞かせてもらって、我情我欲を  
放し、相手の立場に思いを寄せ、互いが助か  
つていくように取り組む。まさに教えの通り、  
「我情我欲を放して真の道を知れよ」を  
実践された良い実例だと思いました。自己  
中心的な凝り固まった思いから解放され  
ることで、互いに助かっていく世界が無限  
に広がるのだと信じています。

今日の教えは、一見すると取っつきにくい  
教えに思えますが、このお話のよ

《天地は語る》

第三回 先を楽しむこと

うに、実は身近なところに、この教えの実践の場がいくつもあるということが分かります。

聞き手 そうですね。先生、ありがとうございます

ました。

ナレーション

先生 こちらこそ、ありがとうございました。

金光教の教祖である、金光大神の教えに、次のようなものがあります。

ナレーション

今日は、「我情我欲を放して真の道を知れよ」

今日は、この教えについてのお話です。「悪いことを言つて待つなよ。先を楽しめ」。

この教えについてのお話でした。

聞き手 先生、こんにちは。

先生 はい、こんにちは。

聞き手 先生は普段生活していて、困ったなど

か、大変だなと思うことが起きた時、いつもと同じように過ごせますか？



先生 いやー、顔には出しませんが、心の中

は落ち着かないですね。

聞き手 そうですよね…。そういう時って、戸

惑ったり、心配な気持ちになりますよ

ね。

先生 はい。大丈夫と思っていて、ついつ

い悪い方に考えることもあります。物

事をいつも良い方に取れたらいいので

すが、なかなかそうもいかないのが私

たちじゃないでしょうか。でもね、今

日の「悪いことを言って待つなよ。先

を楽しめ」という教えから思い出す話

があるんです。

聞き手 はい、聞かせて下さい。

先生 私の教会ではね、お正月に、金光教の

教祖様の教えを書いたものを、おみく

じみたいに引いてもらうんですね。

聞き手 はい。

先生 それで、毎年家族でお参りされる信者

さんがいるんですが、ご夫婦、息子さ

ん、娘さん、それぞれに引いてもらい

ました。

聞き手 はい。

先生 息子さんは、大学受験を控えてました。

頑張って勉強していましたが、段々と

日にちが近付いてきて、不安な様子で

した。そんな中、たまたま引いたのが、

今日の教えの「悪いことを言って待つ

なよ。先を楽しめ」だったんです。

聞き手 ふーん。

先生 息子さんが言うには、このごろ、受験

会場にいる自分の姿を想像しただけで、気分が悪くなつてたようです。周りが気になつて、力が出なかつたらどうしようとか、その日、熱を出したらどうしようとか、落ちるんじゃないかとか、そんなことばかり考えていたそうです。

でも、「悪いことを言つて待つなよ。

先を楽しめ」と言われ、「そうや。ずっと頑張つてきたんやし、大丈夫。ごちやごちや考えるのはやめよう」と、息子さんは気持ちが悪くスツキリしたそうです。

聞き手 へえー、それで、当日どうだったんで

すか？

先生 ええ。不思議と、心が落ち着き、普段

と変わらない状態で受験が出来たんだそうです。

聞き手 そうですかー。じゃあ、結果の方は…？

先生 はい。合格でした。

聞き手 良かったですねえ。息子さんは喜ばれたでしょうね。

先生 はい！そして、その二年後、次は娘

さんの高校受験でした。

聞き手 はい。

先生 それで、彼女が引いた教えも「悪いこ

とを言つて待つなよ」だったんです！

聞き手 えー？まさか、同じ教えばかり入っ

ているんじゃないですかー？

先生 いえいえ。それはないですよ。娘さん

は偶然その教えを引いたんです。

聞き手 じゃ、合格されたんですね。

先生 いや、それが不合格だったんです。

聞き手 え？ お兄ちゃんのようにはいかなかつたんですね。

先生 確かに、結果だけを聞くと、そう思っ

てしまいますよね。けども、合格は

おかげ、不合格はおかげがなかったと、

言えますでしょうか？ …あ、「おかげ

げ」という意味分かります？

聞き手 あー、「おかげさまで」という言い方

はしますから…。ま、お話の流れから

しますと、御利益みたいなことですか？

先生 そうですね。もう少し広げた解釈もあり

ますが、ここでは、そんなふう

に思っています。

聞き手 娘さんは、シヨックだったんじゃない

ですか？

先生 はい…。その公立高校は、自分の実力

では、五分五分かなと話してたんです

が、親御さんも毎日お祈りされてまし

たし、ちよつとは期待もしていたよう

です。

聞き手 お兄ちゃんと同じ、教えも引きまし

たしね。

先生 そうですね。しばらくはつらくて、娘

さんは教会に来れず、お母さんだけが

参拝されました。私もね、悔しいなと

いう気持ちでしたが、お母さんにこう  
言いました。「娘さん、よく頑張って  
こられましたね。お母さんも色々と気  
を遣われたんじゃないですか」。

すると、お母さんはこうおっしゃった  
んですね。「いえいえ、私はただ、娘  
のことを見守るだけでした。でも、こ  
れもおかげだったと思える日が必ず来  
ると思います。体調にはずいぶん気を  
遣いましたから、無事に受験が出来て  
良かったです」と、言われました。  
実はね、入試の一週間前、娘さん、突  
然具合が悪くなったんです。お母さん  
は、何かいけないものを食べさせたの  
かなーって、ヒヤヒヤしたそうですよ。

## 聞き手

へえー、入試の間際に大変だったんで  
すね！。

## 先生

はい。熱も出てきて風邪のようでした。  
普段元気な娘さんでしたが、その時ば  
かりは「もうあかん……。当日までに病  
気が治らないかもしれん。今まで勉強  
してきたのに……」って弱音を吐いてい  
たようです。

その時、お母さんは、ふと、お正月に  
引いた、教祖様の教えを思い出して、  
こんなふうにおっしゃったんだそうで  
す。「もう悪いことを言うのはやめよ。  
絶対に治るって。受験の前の日じやな  
くて良かった」。娘さんは、その言葉  
にホッと、安心して眠ることが出来

て、早く回復されたんですよ。そして無事に受験が出来たんですね。

聞き手 そうだったんですか。

先生 ええ。結局は、先に受かっていた私立高校に行くことになったんですけどもね。新学期が始まって、一月经ったころ、娘さんは教会に来て、うれしそうにこう言ってたんです。「出会った友達が、私と気の合う人ばかりで。クラスのアツキもすごくまとまってて、この学校に来て良かった」って。

私もうれしかったですね。

聞き手 そうなんですか。今日の教えの通りになっただけですね。たと思いい通りにならなくても、先を楽しむにすればいい

んですね。

先生、どうも、ありがとうございました。

先生 はい、ありがとうございました。

ナレーション

今日は、「悪いことを言って待つなよ。先を楽しむ」という教えについてのお話でした。





《天地は語る》

第四回 降っても、照っても

ナレーション

金光教の教祖である金光大神の教えに次のようなものがあります。

「お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。人間はみな、おかげの中に生かされて生きている」

今日は、この教えについて先生にお話を伺います。

聞き手 先生、おはようございます。よろしく

お願いします。

先生 はい。よろしくお願いします。

聞き手

さて、今日のお天気はどうでしょう。

良いお天気になるといいですね。それだけで気持ちも晴れ晴れしますし。

逆に、雨だと、うつとうしい気分になつたりして。「ああ、また傘を持って出掛けなくちゃ」とか。

先生

洗濯物が乾かないとか？

聞き手

そうそう。そうですね。本当に困ります。

先生

そういうこともあるかもしれませんがね。

でも、今日お話ししたいのは、晴れるとお天気が良い、雨だと悪いとか言う

けれども、本当は良い・悪いではなく

って、どちらも神様のお働きなんだ、

ということなんです。

聞き手 はい。

先生 ところで、天水という言葉をご存じで

すか？

聞き手 テンスイ、ですか？

先生 そう。天の水と書いて。

聞き手 ああ。それで、天水ですか。

先生 そう。実は、私も、お米作りをしてい

る農家の方から聞かされて、ああ、こ

んな言い方があるんだ、と思ったんで

すが、雨のことを、こういうふうに表示

現することがあるんですね。天からの

水。天から授かった水。なんか、良い

言葉でしょう。

聞き手 そうですね。

先生 いつでしたか、とても夏の暑い年があ

ったでしょう。その時に、農家の方に

尋ねたことがあるんです。

「今年は、夏の間、お天気が続いたか

ら、良いお米がたくさん取れたでしょ

うね」って。

聞き手 ええ。

先生 そしたら、その方がおっしゃるんです。

「いえいえ、今年は実はあまり良くな

いんです」って。

聞き手 え、どうしてですか？

先生 それがね、お天気が良くても、それだ

けでは、お米には良くないんだそうで

す。その農家の方が言われるのには、

「もうちよつと天水を頂けば良かった

んですが……」っていうことなんです。

聞き手 天水というと、雨のことですか？

先生 そう。そうです。雨も必要なんだそう

です。

聞き手 雨が降らなくて、水不足だったんです

か？

先生 いいえ。今は、農業用水がきちんと整

備されていて、余程のことがなければ、

田んぼの水が不足することはないそう

です。

聞き手 そうなんですか。でも……？

先生 そう。それでもやっぱり、雨が降らな

いといけないんです。

聞き手 へえ……。

先生 夏の暑い時期に、稲が、お日様をいつ

ばいに浴びる。

聞き手 ええ。

先生 もちろん、それは大切なんです。

だけど、それだけじゃなくて、稲が元

気いっばいに育って、良いお米がたく

さん取れるには、雨水を浴びることも

必要なんだそうです。

聞き手 そうなんですか？

先生 お日様の光と、天から降ってくる水を

浴びて、稲がすくすく育つ。なんかほ

ほ笑ましいでしょう、その姿を想像す

ると。

聞き手 ええ。稲がシャワーを浴びてるみたい

ですね。

先生 本当、そんな感じですね。

雨というと、つい、うっとうしく感じ

聞き手 ええ。

てしまったりしますけど、でも、そん

先生 この「おかげ」という言葉、どんな意

な時、稲が、光と雨のシャワーを浴び

味か分かりますか？

て気持ち良さそうにしているところ

聞き手 そうですね。大体は…。

を、ちよつと思ひ浮かべてみてはどう

例えば、誰かにお世話になった時、「あ

でしょうか？ 感じ方が変わるかもし

なたのおかげで」とか言ったりします

れませんかよ。

し。

聞き手 そうですね。そうかも知れません。

先生 そうそう、物事が思い通りにうまくい

先生 ところで、今日の、金光教祖の教えを

った時に、「おかげさまで」というよ

思い出してみてください。

うな言い方を、よくしますね。

聞き手 はい。

聞き手 はい。

先生 「お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降るのもおかげ」と、「おかげ」という言葉が、何回か出てきましたね。

先生 それももちろん「おかげ」なんですけど、ここでは、もうちよつと広く「神様のお働き」というような意味だと思

つて下さい。

つて下さい。

聞き手 神様のお働き…。

先生 そう。それも、いのちを生かそうとする、神様のお働きです。

聞き手 いのち、ですか。

先生 だから、今日のお話も、晴れたり雨が降ったりということには違いはないんですが、そこに、いのちを生かそうとする、神様のお働きがある、ということなんです。

聞き手 でも、雨が降りすぎて、困るということもありますよね。

先生 そうですね。時には、洪水とか、そういう災害になることも…。

逆に、晴ればかりが続きすぎても、困ることになります。

聞き手 それでも、「神様のお働き」なんです

か？

先生 そうですね。時には、人間にとって都合の良いことが起こってくることもあるし、被害が出れば大変なことです。

でも、それでも、お日様のお照らしがなければ、そしてまた、雨が降らなければ、全ての生き物は生きていくことは出来ません。

聞き手 そうですね。

先生 私たちは、自分の力で生きているように思っているけれども、実は、そういう神様のお働きによって、生かされているということなんです。

聞き手 はい。

先生 私たちが生きていくために必要なもの、例えば、水とか食べ物とか…。いろいろありますよね。

聞き手 ええ。今日のお話のお米もそうですね。

先生 そうそう。そういう、たくさんものを通して、神様が、私たちに生きる力を与えて下さっている。

聞き手 はい。

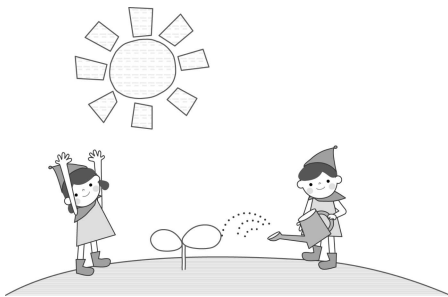
先生 神様のお働きを無駄にしない、神様から与えられたものを大切に作る、そういう生き方をしていきたいものです。

聞き手 そうですね。先生、今日はありがとうございました。ございました。

先生 はい。ありがとうございました。

## ナレーション

今日は、「お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。人間はみな、おかげの中に生かされて生きている」という教えについて先生にお話をお伺いしました。



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

北海道放送 土曜日 あさ5時10分  
東北放送 日曜日 あさ5時00分  
ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分  
東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分  
和歌山放送 日曜日 あさ6時50分  
朝日放送 水曜日 あさ4時50分  
山陽放送 日曜日 あさ6時35分

中国放送 土曜日 あさ5時50分  
南海放送 日曜日 あさ6時00分  
RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分  
宮崎放送 日曜日 あさ7時10分

ここで聴くおはなし

検索

